

## 論文

漢字片仮名交じり文で記された  
親鸞遺文における重点（、）

村井 宏 栄

## 一、はじめに

鎌倉新仏教を代表する浄土真宗の開祖親鸞（一一七三—一二六二）には、多くの遺文が現存する。これらは親鸞本人の直筆資料を多く含み、日本語史研究上第一級資料として位置付けられる。親鸞遺文には、漢文・漢文訓読文・漢字片仮名交じり文（いわゆる片仮名文・漢字交じり片仮名文を含む、以下同じ）・漢字平仮名交じり文・いわゆる仮名文等多彩な表記体を観察することができる。さらに、親鸞遺文には以下の特徴が論じられてきた<sup>注一</sup>。

○「オ」と「ヲ」の対立において、助詞「を」は「ヲ」で表記するのに対し、「をば」「をや」を含む他の語の語頭は「オ」で表記するという独特の仮名遣い

○古用漢字音の墨守

○使用漢字の制限

○漢語は漢字表記、和語は仮名表記という使い分け

これら特徴は多分に規範的性質を持ち、書記法の一貫性が指摘されている。

拙稿、村井宏栄（二〇一八a）では親鸞直筆の一資料である専修寺本『西方指南抄』を対象に、漢字片仮名交じり文書記における重点（いわゆる踊り字、「、」「」の用法について述べた。漢字片仮名交じり文において同音が連続する場合、漢字表記を用いないとする）と、①重点を用いる（例「コ、ロ」）、②同仮名を反復する（例「クニ」）、③いわゆる仮名遣いによる別仮名の使用（例「ヲオモフ」）、という三つの方法が考えられる。重点が用いられる場合、多くは同一音韻と考えられるが、清濁の対立など、別音韻が予想される場合も存する（例「タ、シキ（正しき）」・「思ハ、（思はば）」）。村井宏栄（二〇一八a）では、『西方指南抄』において重点と同仮名反復とがどの位置（自立語／付属語、語頭／語中尾）において、どの割合で用いられるのかについて調査及び考察を行った。結果、本資料において重点は基本的に文節境界をまたがず、前接要素との連続性を標示することで同仮名反復とともに文節を単位とする標示に寄与し、可読性の向上につながっていることが明らかになった。

しかしながら、村井宏栄（二〇一八a）は親鸞遺文において『西方指南抄』という一資料を考察対象としたため、右傾向が親鸞遺文の他資料にも当てはまるか否かは未解明であった。本稿では考察対象を他の漢字片仮名交じり文で記された親鸞遺文資料全体に拡張、一三世紀の漢字片仮名交じり文における一例として、親鸞の漢字片

仮名交じり文書記における重点の用法について述べることを目的とする。

## 二、考察対象の資料

本稿において考察対象とした資料は次の五点である。資料名の直後に、各文献の書写年代と親鸞書写時の年齢を記した。

①専修寺蔵『唯信鈔』（信証本）…寛喜二（一二三〇）年、五八歳  
『唯信鈔』は法然門下の兄弟子である聖覚の著作で、浄土教の教義を説いたものである。聖覚自筆本は伝わっておらず、親鸞の転写本のみが現存する。

②法雲寺蔵『尊号真像銘文』（建長本〈略本〉）…建長七（一二五五）年、八三歳

尊号とは名号のことであり、『尊号真像銘文』は尊号や真像（肖像画）の讃銘に注釈を加えたものである。本文には略本と広本の二種類が知られる。

③専修寺蔵『唯信鈔文意』（信証本、正月廿七日本）…康元二（一二五七）年、八五歳

『唯信鈔』に対する注釈書であり、題名の意味や引用漢文の意義をわかりやすく説く。

④東本願寺蔵『一念多念文意』…康元二（一二五七）年、八五歳  
法然門下の兄弟子である隆寛『一念多念分別事』に対する注釈書である。『一念多念分別事』に挙げられている経文について注釈

する。

⑤専修寺蔵『尊号真像銘文』（正嘉本〈広本〉）…正嘉二（一二五八）年、八六歳

右のうち①のみ親鸞自身の著作ではないが、近時、金子彰（二〇一五）において『唯信鈔』と『唯信鈔文意』の表記が比較検討され、結果、「親鸞は自己の持つ表記法で自著本と転写本を統一し著述している」とされていることから、考察の対象に加えた。

また、②⑤は親鸞の晩年にあたる。この時期の親鸞は民衆を教化するため、わかりやすく書くことに腐心していたと思われる<sup>注三〇</sup>。

ナナカノ・ヒト、ノ・文字<sup>モンシ</sup>ノ・コ、ロモシラス・アサマシキ・  
愚癡<sup>チ</sup>・キワマリナキ・ユヘニ・ヤスク・コ、ロエサセムトテ・  
オナシコトラ・トリカヘシ／＼・カキツケタリ・コ、ロアラム  
ヒトハ・オカシク・オモフヘシ・アサケリヲ・ナスヘシ・シカ  
レトモ・ヒトノ・ソシリヲ・カヘリミス・ヒトスチニ・オロカ  
ナル・ヒト／＼ヲ・コ、ロヘヤスカラムトテ・シルセルナリ

（『一念多念文意』跋文・一〇四）

その目的のために採られた方法が漢字片仮名交じり文という表記体の採用である。かかる方法において、さらに分かち書き、漢字への振り仮名、仮名大小の交替、朱点など、種々の方法を用いて文字連続における境界標示を視覚的に伝達していたと言える<sup>注三〇</sup>。

三、用例数の概観

ここでは、本稿で取り上げた五資料における重点の使用および同字反復について概観する。以下、本稿では「コ、ロ」のような表記を「重点使用」、「ココロ」のような表記を「同字反復」とし、両者を併せて「同仮名（の）連続」と呼ぶ。用例採取において、対象は本文の仮名表記部分に限定し、漢字表記と仮名表記の接続部分や漢字表記右傍に記される振り仮名部分は対象外とする。また、二字以上の重点（「く」「ゝ」「等」）についても取り上げない。

同仮名連続箇所本文の文法的位置及び品詞によって分類した用例数の一覧を資料ごとに示すと以下のとおりとなる。

(表1)『唯信鈔』における重点及び同字反復

合計	節頭 非文		文節 頭	
	その他	付属語	自立語語頭	自立語語中尾
		語頭		
82例	1 (助動詞1)	8 (助詞8)	72 (名詞38、動詞18、副詞16)	1 (名詞1)
21例	0	2 (助詞1、助動詞1)	17 (動詞7、名詞3、接統詞3、形容詞2、形容動詞1、副詞1)	2 (動詞1、名詞1)
103例	11例	74例	18例	合計

(表2)『尊号真像銘文』(建長本)における重点及び同字反復

合計	節頭 非文		文節 頭	
	その他	付属語	自立語語頭	自立語語中尾
		語頭		
55例	1 (助動詞1)	2 (助詞2)	52 (名詞35、動詞15、副詞1、代名詞1)	0
11例	0	2 (助詞1、助動詞1)	1 (動詞1)	8 (動詞6、副詞1、接統詞1)
66例	5例	53例	8例	合計

(表3)『唯信鈔文意』における重点及び同字反復

合計	節頭 非文		文節 頭	
	その他	付属語	自立語語頭	自立語語中尾
		語頭		
79例	1 (助動詞1)	3 (助詞2、助動詞1)	75 (名詞55、動詞17、副詞3)	0
15例	0	5 (助詞4、助動詞1)	10 (動詞3、名詞3、副詞2、形容詞1、接統詞1)	1
94例	9例	75例	10例	合計

(表4)『一念多念文意』における重点及び同字反復

合計	非文節頭		自立語語中尾	自立語語頭	文節頭
	その他	付属語			
64例	1 (助詞1)	3 (助詞3)	60 (名詞48、動詞11、形容詞1)	0	重点
18例	0	10 (助詞9、接尾辞1)	2 (動詞1、名詞1)	6 (動詞3、名詞1、副詞1、接続詞1)	同字反復
82例	14例		62例	6例	合計

(表5)『尊号真像銘文』(正嘉本)における重点及び同字反復

合計	非文節頭			文節頭	
	付属語その他		自立語語中尾	自立語語頭	
	語中尾	語頭			
78例	0	9（助動詞5、助詞4）	69（名詞50、動詞16、副詞2、代名詞1）	0	重点
10例	0	1（助詞1）	2（動詞2）	7（動詞5、副詞1、接統詞1）	同字反復
88例	10例		71例	7例	合計

併せて、参考までに村井宏栄(二〇一八a)で示した専修寺本『西方指南抄』における重点および同字反復についても用例数一覧を示す。なお、『西方指南抄』は法然上人の法語・消息・行状等の言行録であり、康元元(二年(一二五六―五七)、親鸞八四―五歳の時

書写にかかるものである。

(表6)『西方指南抄』における重点及び同字反復(村井宏栄二〇一八a(表1)より形式改)

合計	非文節頭			文節頭	
	付属語その他		自立語語中尾	自立語語頭	
	語中尾	語頭			
799例	9 (助詞1、助動詞8)	99 (助詞95、助動詞2、接尾辞2)	675 (名詞264、動詞216、副詞165、代名詞14、形容詞8、連体詞8)	16 (名詞15、動詞1)	重点
119例	0	33 (助詞27、助動詞4、接尾辞2)	8 (名詞6、動詞1、副詞1)	78 (動詞41、名詞19、副詞8、接統詞5、形容詞2、形容詞1、連体詞1、連語1)	同字反復
918例	141例		683例	94例	合計

重点は文字連続に見られる「記号」であり、前接成分との融合度を示す指標となり得る。すなわち、重点が用いられれば融合度は高く、前接成分とひとまとまりとして意識されやすい。逆に同字反復の場合は前接成分との融合度は低く、境界標示として機能しうる。

右(表1)～(表5)を概観してわかるとおり、一貫して自立語語頭では同字反復が優位であり、対して自立語語中尾では重点が優位である。この傾向は『西方指南抄』に等しく(表6)、資料の異なりを超えて、親鸞書写の漢字片仮名交じり文資料の全体に当ては

まる。(表1) (表6) の合計において、自立語語頭は全一四三例中一二六例(八八・一%)が同字反復によって記され、同様に自立語語中尾は全一〇一八例中一〇〇三例(九八・五%)が重点使用となっている。自立語全体における両者の違例は、合計しても三二例のみであり、これは全体の二・八%に過ぎない。

一方、付属語語頭は一七七例中一二四例(七〇・一%)が重点使用となっており、重点優位ではあるものの、自立語ほどの偏りは認められない。資料によつては、同字反復の用例数が重点のそれを上回るものも見られる(『唯信鈔文意』・『一念多念文意』<sup>注四</sup>)。また、付属語語中尾は全例が重点使用となっている。

なお、(表1) (表5) において、行頭に位置するものは用例数に含み入っていない。五文献のうち、同仮名連続が行頭部分に当たるものは全七例が見られる。いずれも同字反復によって表記しており、重点は用いられていない(／は改行を示す)。

キチマンヘン  
一万偏ヲ・トナエテ・ソノ／ノチニ・他経・他仏ヲ・持念セム  
ハ(『唯信鈔』五一・四)  
タ／夕・如来ノ・至心信樂ヲ・フカク・タノムヘシ(建長本『尊号真像銘文』八・四)  
撰取不捨ノ・コ／コロヲ・アラワシ・タマフ・念仏衆生撰取  
不捨ノ文ヲ・釈シ・タマヘルナリ(建長本『尊号真像銘文』七二・三)  
聖覚和尚ノ・／ノタマハク(建長本『尊号真像銘文』八九・三)

富貴ハ・トメルヒト・ヨキヒト・／トイフ(『唯信鈔文意』四一・三)

名号ヲ・称スルコト・／トコエヒトコエ・キクヒト・ウタカフ・

コ、ロ・一念モ・ナケレハ(『一念多念文意』一〇一・三)

カノ業力ニ・ヒカル／ルユヘニ・ユキヤスク(正嘉本『尊号真像銘文』本二四・二)

これは、村井宏榮(二〇一八a)で示した『西方指南抄』の傾向に等しい。親鸞は漢字片仮名交じり文の書記において、行頭においては重点を用いない方針であったことが伺える。

#### 四、原則合致例

前節での検討によつて、『西方指南抄』に見られた傾向、すなわち自立語語頭では同字反復を用い、逆に自立語語中尾では重点を用いるという傾向は他の漢字片仮名交じり文で記された親鸞遺文にも広く当てはまることが分かった。本稿で調査した五文献について、自立語語頭の同字反復および自立語語中尾の重点使用における、それぞれの具体的な語例を示すと以下のとおりである。

##### 四・一 自立語語頭―同字反復

###### ①『唯信鈔』

・動詞7例「／に+動詞」4(／ニニタリ等)、「／と+動詞」2(／トトケリ)、「／の+動詞」1(／ノノタマハク)

・名詞3例 業ハハカリノコトシ1、アヤフミテテヲ1、タカキキシノ1

・接統詞3例 シリヌヘシカルニ1、ナシシカハアレトモ1、モシシカラハ1

・形容詞2例 「〜に+形容詞」1（〜ニカキ）、〜コトトオキニヨリ1

・形容動詞1例 アルイハハルカニ1

・副詞1例 イママタ1

## ②『尊号真像銘文』（建長本）

・動詞6例 「〜の+動詞」4（〜ノタマハク等）、「〜と+動詞」2（〜トトキタマヘル等）

・副詞1例 自然ハハシメテ1

・接統詞1例 〜トシルヘシシカレハ1

## ③『唯信鈔文意』

・動詞3例 「〜と+動詞」3（〜トトナエヨト等）

・名詞3例 「〜は+はじめ」2（〜トイフハハシメノ等）、「〜ヲモテルコト」八十億劫1

・副詞2例 人ノミミナ1、甚ハハナハタト1

・形容詞1例 〜トイフフカシト1

・接統詞1例 〜ナスヘシシカレトモ1

## ④『一念多念文意』

・動詞3例 「〜と+動詞」3（〜トトキタマヘリ）

・名詞1例 称ハハカリトイフ1

・副詞1例 法則トイフハハシメテ1

・接統詞1例 〜ナスヘシシカレトモ1

## ⑤『尊号真像銘文』（正嘉本）

・動詞5例 「〜と+動詞」3（〜トトキタマフ等）、「〜の+動詞」2（〜ノタマハク等）

・副詞1例 自然トイフハハハシメテ1

・接統詞1例 〜トシルヘシシカレハ1

自立語語頭は五文獻ともに同字反復が優位である。語例を観察すると、「〜に+動詞」「〜と+動詞」のような、格助詞に後接する動詞冒頭の例はもとより、「タカキキシノ」のように連体修飾構造の被修飾名詞にも同字反復が用いられていることがわかる。文字連続において、文節境界が意識されていたことが指摘できる。なお、五文獻すべてにおいて接統詞例が見られる。これらは多く同字反復の直前で文が終止している。これも「重点は文節境界を越えない」という原則に帰納される。

## 四・二 自立語語中尾―重点

### ①『唯信鈔』

・名詞38例 御コ、ロ1、コ、ロ33、コ、ロサシ1、ス、メ1、タナコ、ロ1、フタコ、ロ1

・動詞18例 アソヒタハフル、ハ、カ、ミテ、キ、テ等

・副詞16例 タ、10、タ、シ2、タ、チニ3、フタ、ヒ1

### ②『尊号真像銘文』（建長本）

・名詞35例 イタ、キ1、御コ、ロ2、コ、ロ27、ス、メ1、フ

タコ、ロ4

・動詞15例 コ、ロフヘシト、ス、メタマフニ、ト、マルナリ等

・副詞1例 タ、1

・代名詞1例 コ、1

### ③『唯信鈔文意』

・名詞55例 御コ、ロ2、コ、ロ48、ヒトツコ、ロ1、フタコ、

ロ2、チ、ハ、1

・動詞17例 オソル、ト、マル、ムマル、等

・副詞3例 タ、3

### ④『一念多念文意』

・名詞48例 御コ、ロ5、コ、ロ39、ス、メ1、タ、サマ1、フ

タコ、ロ2

・動詞11例 コ、ロエサセムトテ、キ、テ、ス、ム等

・形容詞1例 タ、シキ1

### ⑤『尊号真像銘文』(正嘉本)

・名詞50例 イタ、キ1、御コ、ロ4、コ、ロ39、ス、メ1、タ、

サマ1、フタコ、ロ4

・動詞16例 キ、マイラセテ、ス、メタマフニ、ムマル、等

・副詞2例 タ、2

・代名詞1例 コ、1

自立語語中尾は重点が一貫して優位である。どの資料においても名詞が最多であるが、これは本稿で用いた資料群が、教義を明快にわかりやすく述べることを目的としていたり、あるいは注釈である

という資料性質が関係しており、「コ、ロ・御コ、ロ・フタコ、ロ」など、「コ、ロ」(意:心)に関係する語が頻出することに起因する。

## 五、原則例外例

### 五・一 自立語語頭―重点

しかしながら、原則に合致しない例も若干数見られる。まず、自立語語頭は同字反復を原則としつつも、例外的に重点によって記される例が一例のみ認められる。

#### ①『唯信鈔』

・名詞1例 ソノ、チ

「ソノ、チ」は、『西方指南抄』においても唯一慣用的な例外例として指摘したものである。さらに「ソノ、チ」の表記は、先行研究によつて親鸞遺文以外の複数文献に亘る慣用的表記と指摘されている<sup>注五</sup>。親鸞は複数資料に亘つて安定的にこの表記を用いており、親鸞資料の規範的性質の表れと言えよう。

さらに、慣用例を除いて原則例外例がほぼ見られない状況は、親鸞遺文の仮名遣いにも起因する。同音連続を漢字以外によつて表記する際、重点・同字反復以外にも、いわゆる仮名遣いによる別仮名の使用が行われるが、かかる方法において大多数を占めるのは「ソヲオウ」(動詞)および「オホ」<sup>注六</sup>という表現形式である。

前述のとおり、親鸞遺文においては「オ」と「ヲ」の対立においては、助詞「を」を「ヲ」で表記すること、一方それ以外の語の語

頭を「オ」で表記することの二点を以て、「ゝを＋動詞」は「ゝヲ＋オ：」となることから、必然的に重点は用いられない。親鸞遺文においては「オ」は〈語頭〉、対して「ヲ」は〈非語頭・非文節頭〉のマークとして機能していると言え、かかる仮名の使い分けによって重点を使用しないものと指摘できる。

## 五・二 自立語語中尾―同字反復

同様に、自立語語中尾においては重点使用を原則とするが、例外的に同字反復する例が計七例見られる。

### ①『唯信鈔』

・動詞1例 アラハシシラセテ

・名詞1例 アリノママ

### ②『尊号真像銘文』(建長本)

・動詞1例 アラハシシメストナリ

### ④『一念多念文意』

・動詞1例 トトマル

・名詞1例 ヨヨニ

### ⑤『尊号真像銘文』(正嘉本)

・動詞2例 アラハシシメストナリ、御覧シシルヘシ

右のうち、「アラハシシラセテ」(『唯信鈔』)、「アラハシシメストナリ」(建長本・正嘉本『尊号真像銘文』)、「御覧シシルヘシ」(正嘉本『尊号真像銘文』)の計四例は複合動詞の後部要素冒頭である。

さらにこの四例については、全例、前接要素との境界において朱点が差されている。親鸞遺文においてはおおよそ文節に相当する単位で朱点が施されることが多い。かかる部分を同字反復によって記すのは、後部要素に意味的なまとまりを認め、境界を認識しているという分析的態度の表れと評価できる。

ミニトリテ・ハ、カルヘク・ハチカマシキコトオモ・人<sup>ヒト</sup>・アラハシ・シラセテ・カヘリテ(『唯信鈔』六二・四)

下至<sup>シ</sup>トイフハ・十声<sup>シヤウ</sup>・アマレルモノ・一念<sup>ニ</sup>念<sup>ニ</sup>聞名<sup>モナナ</sup>ノ・モノヲ・

往生<sup>オウシヤウ</sup>・モラサス・キラハヌコトヲ・アラハシ・シメストナリ(建

長本『尊号真像銘文』五六・五)

下至<sup>ケシ</sup>トイフハ・十声<sup>シヤウ</sup>・アマレルモノ(右傍に朱筆「モ」あり)・

聞名<sup>モナナ</sup>ノモノヲ(右傍に朱筆「モ」あり)・往生<sup>オウシヤウ</sup>・モラサス・

キラハヌコトヲ・アラハシ・シメスト也(正嘉本『尊号真像銘

文』本七一・六)

ヨク、・・コノ和尚<sup>オウショウ</sup>ノ・コノオシエヲ・御覧<sup>ゴラン</sup>シ・シルヘシト(正

嘉本『尊号真像銘文』末四三・五)

他、動詞「トトマル」、名詞「アリノママ」「ヨヨニ」の例がそれ

ぞれ一例ずつ見られた。

者<sup>シヤ</sup>ハ・ヒト<sup>ト</sup>トイフ・ムナシク・スクル・ヒト・ナシト・イフハ・

信心<sup>シンシン</sup>・アラムヒト・ムナシク・生死<sup>シヤウシ</sup>・トトマルコト・ナシト

ナリ(『一念多念文意』八六・五)

ヨロツノコト・アリノ・ママナラスハ・虚<sup>コケ</sup>仮<sup>ニ</sup>・ナリナムスト  
 テ『唯信鈔』六二・二  
 シカレハ・諸<sup>シヨフチ</sup>仏<sup>ニ</sup>ノヨヨニ・イテタマフ・ユヘハ『一念多念文意』  
 七三・四

「トトマル」の例は、傍線部の二行前に「ヒトト」（波線例）があり、これに引きずられたものかと思われる。「アリノママ」の例は、これが重点で記されると「アリノマ」となり、「一、一、」と見誤る可能性がある。これを回避するために同字反復で記されたものと想像される。最後に、「ヨヨニ」の例が同字反復で記された理由は不明であるが、「和語は仮名表記する」という基本方針の下、漢字表記「世世」が念頭にあったためかと思われる。

## 六、助詞の表記

最後に、助詞の表記について述べる。親鸞の漢字片仮名交じり文表記においては、自立語語頭は同字反復によって、また自立語語中尾は重点によって記す傾向が強く、例外にあたるものについても、その多くは要因が推定されるものであった。概して表記傾向の一貫性は高いと言える。

一方で、付属語、中でも助詞語頭の表記は、本稿の調査における五文献に『西方指南抄』を加えた場合、重点一一五例に対して同字反復四三例が観察される。全体の傾向として重点優位であるものの、同字反復についても相当数が認められ、自立語に比べてばらつき

大きさが際立つ。「重点は文節境界を越えない」という規則において助詞語頭に重点を使用すると、それは自立語プラス助詞という文節単位のもとまりを標示することとなる。一方で、同字反復で記されると、自立語・助詞間の境界によって文節内部に境界が存することが標示される。村井宏榮（二〇一八b）は、大福光寺本及び前田家本『方丈記』の重点について報告するが、両本の助詞語頭は全例重点が用いられ、同字反復は一切見られていない<sup>注七</sup>。同仮名の連続において、助詞語頭をすべて重点によって示すという方法もありえたはずであるが、親鸞の漢字片仮名交じり文においては、文節内部でも同字反復による境界標示をまま行うという、より細やかな単位での言語分節標示がなされていると指摘できる。

しかしながら、助詞表記においては、助詞の種別によって傾向が大きく異なる。どの助詞を同字反復しやすいのかを調査することによって、個々の助詞に対する親鸞の単語意識をうかがうことができる。助詞の種別によって用例数をまとめたのが（表7）である。

（表7）助詞語頭における重点及び同字反復

	重点	
同字反復	0	1
	4	52
	14	5
	21	8
	0	14
	2	1
	1	31
	0	1
	1	1
	43	114
		計

（表7）によると、助詞語頭においては、助詞の種別によって重点優位であるものと同字反復優位であるものとが認められる。

重点優位であるものとして、「て」（五二例対四例）、「ば」（三一

例対一例)、「の」(一四例対〇例)、が挙げられる。これらはすなわち前接成分との融合度合いが高いと換言できる。

タトヘハ・人アリテ・念仏ノ行ヲ・タテ、(『唯信鈔』

四六・五)

穢土<sup>エト</sup>ステ、<sup>ニ</sup>・真実報土<sup>シンシチホウト</sup>・キタラシムトナリ(『唯信鈔文意』

二二・二)

本尊<sup>ホンゾン</sup>・ムカハ、<sup>ニ</sup>・弥陀ノ・形像<sup>キヤウザウ</sup>・ムカフヘシ(『唯信鈔』

五二・四)

欲入淨土門<sup>ヨクランシャウトモン</sup>トイフハ・淨土門<sup>シャウトモン</sup>・イラムト・オモハ、ト・イフ

ナリ(建長本『尊号真像銘文』七六・二)

スナワチ・末代惡世<sup>マチタイアクセ</sup>ノ・無智<sup>ムチ</sup>ノ・衆生<sup>シュンシヤウ</sup>ハ・カノマツシキ・モノ、

コトキナリ(『西方指南抄』下末二八・六)

コノユヘニ・オノオノ、ハカラフコ、ロヲ・モタルホトオハ

(正嘉本『尊号真像銘文』末六〇・四)

一方、同字反復優位であるものとして、「に」(八例対二一例)、「と」(五例対一四例)が挙げられる。これらは前接成分との融合度合いが低く、すなわち単語としての析出度が高いと言えよう。

コレニ・ヨリテ・カノクニ<sup>ニ</sup>・ムマレムト・オモハムモ・マタ・

マコトノ・コ、ロヲ・オコスヘシ(『唯信鈔』五九・二)

モシ・ワカクニ<sup>ニ</sup>・ムマレスハ・仏ニ・ナラシト・チカヒタマ

ヘル・本願ナリ(『唯信鈔文意』九九・四)

一念ヲヒカコトト・オモフマシキ事(『一念多念文意』三・一)  
安養<sup>アンヤウ</sup>トイフハ・弥陀<sup>ミタ</sup>ヲ・ホメタテマツル・ミコトト・ミエタリ  
(正嘉本『尊号真像銘文』本一七・六)

右のうち、『唯信鈔』の「カノクニ」の例では、同字反復部分の「ニ」が前接の「ニ」よりも明らかに小さく書かれており、時に仮名大小の対立によっても境界標示がなされている。「ニ」に対する単語意識の証左となる。

重点優位である助詞は前接要素が動詞成分である例が多いのに対し(例「タテ」、「ネカハ」、「」)、同字反復優位である助詞は前接要素が名詞成分であることが多く、前者は用言との熟合度の高さのために重点が用いられるのであるう。しかしながら、「の」は「オノオノ」、「モノ」、「タキモノ」、「」等、前接成分はすべて名詞である。前接要素の品詞性によってのみ選択が行われているわけではなく、やはり助詞の種類という要因が関与すると考えられる。

『西方指南抄』の助詞においても、全般的に重点が優位である中で「に」と「と」のみは同字反復が優勢であることを示し、その要因を推定した(村井宏栄二〇一八a)。詳細は前稿に譲るが、本稿の調査はこの方向性に合致し、広く親鸞の漢字片仮名交じり文資料全体に亘ってあてはまるものと考えられる。

## 七、むすびに代えて

本稿の結論を以下にまとめる。

【ア】漢字片仮名交じり文で記された親鸞資料五文献における重点及び同字反復について観察すると、全文献において自立語語頭では同字反復を行い、自立語語中尾では重点を用いる傾向が認められ、書記法の一貫性はかなり高いと評価できる。これは前稿(二〇一八a)で取り上げた『西方指南抄』の傾向に等しいことから、かかる傾向は親鸞の漢字片仮名交じり文資料に広くあてはまるものと言える。

【イ】助詞語頭については重点優位であるものの、同字反復もまま見られ、中でも助詞「に」と「と」については、助詞の一般的傾向とは逆に同字反復が優勢である。これらにおいては助詞の析出度が高いと言え、親鸞の単語意識をうかがうことができる。この状況についても、【ア】と同様、前稿(二〇一八a)で取り上げた『西方指南抄』の傾向に等しく、親鸞資料の一貫性として位置付けられる。

中世漢字片仮名交じり文の書記は、文字体系の交替(漢字↓仮名、仮名↓漢字)が分節機能の一部を担うことに加え、句読点・朱点やスペースの挿入(分かち書き)、仮名大小の交替(大↓小、小↓大)、振り仮名等の事象が時にこれを補助する。また、改行や異体仮名の使用がこれに参与する可能性もあり、さらに、たとえば親鸞遺文における「オ」と「ヲ」の対立のように、仮名遣いも結果的に分節標示の役割を担いうる。補助符号の一種たる重点が、これら種々の手段とどのように関わり、中世漢字片仮名交じり文書記においていか

に位置付けられるのか、追究する必要が存する。一三世紀前後の漢字片仮名交じり文献全般に考察の対象を拡げること、重点用法の一般的状況の解明につなげていくことを今後の課題とする。

#### 注

一 吉沢義則(一九二七)、金子彰(一九七八・一九八〇・一九八五)、佐々木勇(二〇一〇・二〇一一年・二〇一一年b)など。

二 以下引用に際し、左注・声点等はいらない限り省略する。なお、傍線等は稿者による。

三 宮田裕行(一九八一)は、親鸞遺文における分かち書き・朱点について詳細な報告を行っている。

四 佐々木勇(二〇〇九)によると、漢字片仮名交じり文による親鸞資料のうち、『唯信鈔文意』『一念多念文意』のみは一切の声点が差されていないという。さらに、佐々木勇(二〇一五)は親鸞資料全体について詳細な表記体の分類を行っており、これによると、本稿で取り上げた資料のうち、『唯信鈔』、『尊号真像銘文』(略本・広本)、『西方指南抄』は「漢字・片仮名交じり文」、対して『唯信鈔文意』『一念多念文意』は「漢字交じり片仮名文」に分類されるという。本稿の調査範囲の中で、付属語語頭において同字反復で記す用例数が重点使用を上回るのは、後者二文献のみである。両者はともに「二、考察対象の資料」で示した文言が跋文に記される。これら二文献は漢字の知識のない人々に向けて書かれ、親鸞資料の中でも、より「わかりやすさ」を追求した文献である。文節内部においても同字反復によって助詞を析出して示す方向性は、この性質を支持すると思われるが、本稿の調査で得られた助詞語頭の用例数が少ないため、推測に留めたい。

#### 五

矢田勉(二〇一二)は、鎌倉期の平仮名文経済文書(讓状・売券・寄進状など)において、文節境界を越える同仮名連続は基本的に同字反復によって記されるものの、「の、ち」のみは文節頭でも重点を使用し、この傾向は「固定的な表記として後々まで残る」と指摘している。また、鄭炫赫(二〇〇六)は、慶應義塾図書館蔵『狭衣の中將』(二五九七年写)及び国字本キリシタ

ン資料であるカサナテンセ図書館蔵『ぢぢりなきりしたん』(一六〇〇年刊)について、文節頭でも例外的に重点を使用した「その、ち」が共通して見られることを報告している。

六 例えば『唯信鈔』においては、次の用例が挙げられる(活用語は終止形で示し、用例数は総計で示す)。

【「を」+動詞】二五例

「ヲオコス(発・起)」「ヲオコナフ(行)」「ヲオサム(収・修)」「ヲオシユ(教)」「ヲオシム(惜)」「ヲオス(押)」「ヲオソル(恐・懼)」「ヲオモヒイツ(思出・想出)」「ヲオモフ(思・想)」「ヲオロス(下・降)」

【おほし】七例

オホシ(多) オホキナリ(大) オホヨソ(大凡)

【その他】四例

「ヲオモシトセス(「を」を重しとせず)」「ニハワカミハ(「には」は我が身は)

「ハワツカニ(「は」は僅かに)

七 大福光寺本『方丈記』及び前田家本『方丈記』における助詞語頭の同仮名連続はそれぞれ一七例と二〇例が見られ、全例重点使用となっている。

#### 引用文献

金子彰(一九七八)「親鸞の仮名づかい」『国文学攷』七六

金子彰(一九八〇)「親鸞聖人遺文の表記研究(1)―自筆書簡に於ける語の漢字表記を主として―」『新潟大学教育学部長岡分校研究紀要』二五

金子彰(一九八五)「親鸞聖人遺文の表記研究(2)―親鸞自筆書簡と親鸞写法然書簡・法然自筆書簡との比較を通して見た語の漢字表記について その(1)(漢語の仮名表記)―」『新潟大学教育学部附属長岡校園教育論究』二五

金子彰(二〇一五)「親鸞の転写本と自著本の著述の方法―「唯信抄」と「唯信抄文意」の比較を通して―」中山緑朗編『日本語史の研究と資料』明治書院

佐々木勇(二〇〇九)『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』第三部第五章、汲古書院、初出は同(二〇〇〇)「鎌倉時代における舌内入声音の諸相」『鎌倉時代語研究』二三、武蔵野書院

佐々木勇(二〇一〇)「親鸞と明恵の漢字音―漢字片仮名交じり文における比較―」『広島大学大学院教育学研究紀要 第二部』五九

佐々木勇(二〇一一a)「親鸞聖人の仮名遣いについて」『浄土真宗総合研究』六

佐々木勇(二〇一一b)「親鸞遺文における「オハ」等の仮名遣い開始時期と異例について―漢文の訓点における実態調査とその位置づけ―」『国文学攷』二〇九

佐々木勇(二〇一五)「記念講演 親鸞聖人の漢字音に見られる諸相」『真宗学』一三二

鄭炫赫(二〇〇六)「キリシタン版国字本宗教書の重点について」『論集』(アキセント史資料研究会)二

宮田裕行(一九八二)「親鸞上人の言語意識―分ち書き・句読点から複合語に及ぶ―」『国語語彙史の研究』二、和泉書院

村井宏栄(二〇一八a)『西方指南抄』における重点について」『相山女学園大学研究論集人文科学篇』四九

村井宏栄(二〇一八b)「中世片仮名文における重点(「、」)―大福光寺本『方丈記』を軸として―」第一一九回国語語彙史研究会口頭発表

矢田勉(二〇一二)「国語文字・表記史の研究」第三編第七章、汲古書院、初出は同(一九九五)「異体がな使い分けの発生」『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院

吉沢義則(一九二七)『国語国文の研究』岩波書店、初出は同(一九二二)「親鸞聖人の写語法」『龍谷大学論叢』二四六

使用テキスト:『増補親鸞聖人真蹟集成』第四・六・十卷(宝蔵館)

付記 本稿は平成三〇〜三二年度科学研究費補助金(基盤研究C)「中世漢字片仮名交じり文における重点を中心とした書記史的研究(課題番号:18K00626)」(研究代表者:村井宏栄)による研究成果の一部である。